

わが心の山 富士を語る その6
末期症状を呈してきた富士山

登山に出掛ける時には小さなノートポケットに入れて、歩きながら旅の記録を走り書きしていた。このノートのメモを元にして山旅の記録を文集として残しておこうと思い立ち、昭和42年頃からB5版のノートに書き始めた。ノートの名前は「踏み跡」と名付け、6冊になった。そして後にこれが発展的な形態となり、電子化（MS Wordによる）とホームページへの掲載に至った。生真面目に山旅日記を書き連ねるだけでは自分が退屈してしまうと思ったからだろうか、ところどころに漫画的なイラストが挟まっている。

「踏み跡 No.2」は昭和39年夏～40年夏の記録が載っており、昭和42年9月に完成した。昭和42年、観光旅行・レジャーなどという言葉が広まり始めた頃だっただろうか。昭和36年にできた富士急ハイランドは大きなスケートリンクが売り物だった。そして昭和41年にはジェットコースターができ、アイススケート客以外にも「遊びに行く人」が殺到するようになった。富士山の周囲の交通機関・観光施設の殆どが富士急行という会社、またはその関係先の手によるもので、様々なレジャー施設が作られて、それがすべてこの会社の利益につながるという図式を感じさせるものだった。富士山周辺の急速な変化に様々な危惧を感じる人は少なくなかったが、私もその一人だった。このまま、今の流れに沿って行くとどうなってしまうだろうか？そんな心配が我が手を滑らせてしまったらしく、「踏み跡 No.2」の中の1頁に「Fujiyama, Oh No! 末期症状を呈してきた富士山」という風刺画を書いてしまった。当時の科学技術の発展度合いから、また当時の経済成長の予測からなど様々な社会変化とその予測から、「これはえらいことになってしまうかも・・・」と思った。現在（平成26年）その危惧は当たっていたかどうか・・・、これからそうなるかもしれない状況にあるのか・・・不明ではあるが、23才の私が描いた心配事を紹介して見ることにする。

◆お鉢めぐりのゴンドラと富士タワー

3776mの山頂を含む稜線（お鉢）には展望用のゴンドラが一周し、座ったままでお鉢めぐりができるようになっている。そして、お鉢の底から立ち上がった「富士タワー」の先端は海拔4250mの高さになる。

◆大深度地下ホテルと長距離エレベーター

山腹の河口湖側から掘削されたトンネルの一番奥は富士山のほぼ中央部。ここには大深度地下ホテルがある。ホテルのエレベーターに乗ると富士タワーの足元まで行くことができる。

◆富士スパイラルライン

スバルラインは延伸され、富士山の山腹を螺旋状に登って頂上まで達することができる。スバルラインという名はもうなくなり「スパイラルライン」と改称された。

◆富士登山

今や歩いて登る人は僅かしかいない。殆どの人が富士スパイラルラインを車で上がってしまう。吉田口・須走口の登山道の入り口には「健脚向き」の標識と注意書きが建っている。

◆三ツ峠山のなれの果て

昭和34年に開業した河口湖ロープウェイはその後さらなる改良と延伸が進み、河口湖の湖畔から三ツ峠山の山頂まで観光客を運んでくれるようになった。従来の登山口である富士急行の「三ツ峠駅」は今や存亡の危機にさらされている。

◆別荘団地

河口湖・山中湖の周辺はホテルや別荘で埋め尽くされ、開発の手は隣の湖にまで迫っている。西湖・精進湖の北側の山林は切り開かれて別荘団地が林立。

◆新しい鉄道

山中湖の回りを一周する道路は周回鉄道に変わり、湖にはヨットが浮かぶ。

富士吉田から御殿場へ抜ける国道の下には地下鉄が走っており、登山口近くには駅の地上出口が設けられている。

富士山の横腹をぶち抜いたトンネルは、新身延線。御殿場と身延山を一直線に結ぶ高速鉄道。

◆そしてその結果・・・

3776mの山頂周辺、夕方になると餌を求めてカラスの一群が飛び交うようになった。カラスも進化を遂げ、希薄な酸素でも生きられる呼吸器を持つようになった。



以上